

財団法人松井文庫所蔵品から、公文書に用いられた檀紙や奉書紙、手紙を書くための巻紙や絵半切、紙子の反物、美しい文様の千代紙などさまざまな和紙を紹介します。

楽 しむ紙



●おもちゃ絵「当世馬の乗り替え」
—明治36年(1903)—
切り抜いたいろいろな服装の人物を馬に乗せて遊びました。



ペーパークラフト
一枚の紙の中に隙間なく描かれた人物や建物ははさみなどで切り抜いて組み立てます。夕涼みの床机の上などで紙燭を灯して飾ってその出来栄を楽しんだ夏の遊びです。江戸時代から大正時代にかけて江戸・大坂・京で盛んに行われました。遊んだ後は捨てられてしまう消耗品であったため、現在では貴重なものとなっています。

「大阪御陣雪中大合戦」組上り図



●切組灯笼「大阪御陣雪中大合戦」
—明治27年(1894)—
東京浅草、牧金之助発行。
5枚セット。組み立てると左のようになります。



●切組灯笼「殿様お国入り行列」
—文久元年(1861)—
上方の絵師長谷川貞信画。3枚セットで、それぞれ切り抜いて組み立てるとお国入りの行列が出来上がります。

公 文書に
用いられた紙

幕府や藩が公文書に使用した檀紙や奉書紙。越前(福井県)産の紙が最高級とされ、肥後細川藩でも越前産を購入していました。しかし、安永年間(1772~1778)に八代宮地の木村春三が越前産と同等の高級紙の製造に成功し、以後藩では宮地産の紙が使用されるようになりました。



●大奉書紙 —久本田平兵衛 製(宮地)—



●白ちり —藤田芳明 製(宮地・昭和時代)—

日 用の紙

近世初期より紙の産地であった八代宮地では、御用紙造りたちが檀紙や奉書紙、水玉紙など高い技術を持って高級紙を生産していたことが知られていますが、日用の紙を造る紙造りも多かったです。障子紙やちり紙などは消耗品であったために現存するものがほとんどありませんが、幸いにも松井文庫には未使用の紙が残されており、品名や製造者名など多くの情報をもたらしてくれます。

手 紙を書く紙



季節の風物や物語の一場面を切り出したものなど様々な趣向をこらした絵半切(便箋)や、それに合わせた封筒類。製作所の金花堂や椿原など日本橋の店で購入されたものが多く残っています。

身 につける紙

紙子は、布地の代用として加工した楮紙を着物に仕立てたもので、防寒着として利用されました。

八代では、天和3年(1683)に宮地の宮原忠平が紙子製造の御用を仰せつかり、代々宮原家が製造に携わってきました。製品は「肥後八代紙子」として全国的に知られ、明治6年(1873)のウィーン万国博にも出品されました。



●薄羅地紙小紋紙子反物

こ んな紙も…



●金唐革紙

近世初期オランダからもたらされた金唐革に似せて、明治5年(1872)に開発された紙です。ウィーン万国博に出品されたのを機に壁紙としてヨーロッパにも輸出されていました。